日本
マレーシア
ビデオ
交流
福岡展

2009年10月8日(木)・9日(金)・10日(土)　入場無料
主催：「日本・マレーシアビデオ交流福岡展」実行委員会　会場：福岡アジア美術館あじびホール

マレーシアは多言語・他人種・他宗教国家である。文化的な背景が異なる人びとが混在し刺激しあっている。
アートもそうした状況を反映し、文字通り多様な展開を見せている。
映像を使った表現は 90 年代から多発的に現れた比較的新しいジャンルである。
今回来日するマレーシアの作家たちは、現代アートの表現形式としてビデオ映像を使いこなしている。

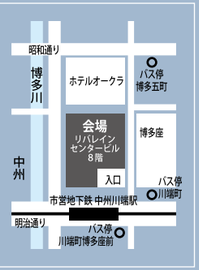
日本マレーシアビデオ交流 - 福岡 - 展

10月8日（木）15：00〜18：00　10月10日（土）15：00〜19：00
10月9日（金）15：00〜19：00

会場案内

福岡アジア美術館 あじびホール
http://faam.city.fukuoka.lg.jp/
福岡市博多区下川端町 3-1 リバレインセンタービル 8F

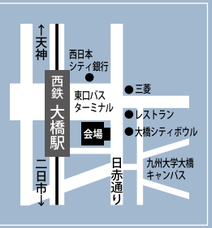
アクセス
市営地下鉄
・中洲川端駅下車、6番出口より徒歩すぐ
西鉄バス
・川端町博多座前バス停下車、徒歩すぐ



オープニング交流イベント
マレーシア作家を囲んで
（若干の参加費をお願いいたします。）

日時：10月6日（火）16：00〜20：00

会場：九州大学 USI サテライト ルネット
福岡市南区大橋 1 丁目 3 番 27 号
アクセス・西鉄 大橋駅 東口より徒歩すぐ



関連企画

板橋熱帯環境植物館　開館 15 周年記念「マレーシア展」
9月12日（土）〜10月12日（月）／板橋区立熱帯環境植物館

「無礼講 2009 マレーシアスペシャル」in 東京
10月2日（金）〜10月3日（土）／六本木ストライプスペース

教育プログラム

長野県高等学校視聴覚教育研究大会ワークショップ
9月26日（土）〜9月27日（日）

日本工学院専門学校ワークショップ
9月28日（月）〜10月1日（木）

日本大学レクチャー
10月2日（金）

九州産業大学レクチャー
10月7日（水）

主催：「日本・マレーシアビデオ交流福岡展」実行委員会
共催：SVP2、福岡アジア美術館
後援：(財)福岡市文化芸術振興財団、福岡市
助成：(財)福岡市文化芸術振興財団、国際交流基金

協力：日本映像学会西部支部
九州産業大学芸術学会
九州産業大学国際交流委員会
九州大学 USI サテライト ルネット

福岡展事務局・問い合わせ
NPO法人デザイン都市・プロジェクト
〒815-0033　福岡市南区大橋 2-2-1 マルイビル 2 階
TEL：092-511-6417

日本・マレーシアビデオ交流事業事務局：SVP2 <http://svp2.com>

来日マレーシア作家プロフィール

Kamal Sabran
カマル・サブラン

絵画、ビデオアート、ショートフィルム、インタラクティブ、サウンドアート、インスタレーションなどの学際的アーティスト。エレクトロプリミティブ、スペース・ガンバス・エクスペリメント、スプロールを設立。エレクトロアコースティック、実験即興音楽、メディアアートのパフォーマンスをおこなう。

Kok Siew-wai
コク・シュウワイ

ビデオアート、サウンド、ボイス・インプロビゼーション作家。米国留学中にボーリン・オリヴェロス、トニー・コンラッド、ビイア・ボーデなどの指導で「新しい」アートと出会う。イスカンダル・マレーシア・アート・ショウ2009やチョッパ・エレクトリック・インプロバイズド・ミュージックフェス2008（シンガポール）、ロッテルダム・フィルムフェスティバル2007など数多くのフェスティバルに参加。チェラス・クアラルンプールにある地元作家集団シックケーエル（SiCKL）を共同設立・運営する。

Sharon Chin
シャロン・チン

文章と彫刻を使い特に場に固有なインスタレーション作品を作る。私たちが地理、歴史、人や言語といかに交渉を持つかを彼女の作品は観察する。マレーシアを中心にシンガポール、タイ、オーストラリアで作品を発表。伝達手法としての芸術への趣向拡大とともに最近パフォーマンスやビデオに手をのばしはじめる。国際交流基金ジェネシス企画に参加しレジデンシー・アーティストとして今年7月まで札幌に滞在。作家活動の他に執筆も行い、マレーシアと東南アジアの現代美術のポータル、アーテリ（www.arterimalaysia.com）を共同設立、運営、執筆をおこなっている。

Nur Hanim Khairuddin
ヌル・ハニム・カイルディン

イポー市を拠点に活動する作家、キュレーター、ライター、芸術文化の促進者。1996 年以来ペラク州の芸術基金のキュレーターを務め社会事業、芸術、文芸、出版を主導する。出版会社テラタク・ヌロマーを所有し、ヴィジュアル・アート・マガジン、セントアプ（sentAp!）やアミル・ファキアの「私の間違い」、サクラトオやスペース・ガンバスの音楽アルバムを出版している。芸術や文化について kakiseni.com や ArtIT、Universes-in-Universe に執筆・寄稿し、展覧会に執筆者として招待されている。

A ドキュメンタリーの動向
～混在する文化と顕在する記憶～

ナジブ・ラザクの作品はマレーシア漁民の伝統を見つめた作品である。この作品を起点に、地域と歴史、独立運動の軌跡、ドキュメンタリー表現の追究を見る。言葉では埋めることができない隔たりは、確固としてあるマレーシアの多様性を知る教科書はドキュメンタリーである。

『人魚島の子ども』
Naguib Razak　ナジブ・ラザク　1999年　10分

『Rainy Days』（雨の日々）
Rajen Paramesran　ラジャン・パラメスラン　2006 年　13 分

『Bo Lang Chai』（忘失）
Ong Boon Keong　オン・ブーンキョン　2007年　35分

『Ten Years Before Independence』（独立十年前）
Fahmi Reza　ファミ・レザ　2007年　30分

B ビデオアートの動向
～潜在する表現と内在する思考～

マレーシアでのビデオアートはまだ若く、多くの作家によって表現が模索され、更新され続けている。シュウ・ワイはパフォーマンスをベースに、さまざまな環境の中に自身を投じてみせる。サウンドトラックはボイスパフォーマンスと環境音で構成される。マスヌールはマレーシアの文化的混在をユニークな手法で見せる。シャロンはコミュニケーションをテーマにしたワークショップを各地で展開しているが、映像作品でも作品成立のプロセスを問題にしている。カマルはライブパフォーマンスでも作品を発表している。自ら作る音楽と都市のランドスケープとの関係をその題材に使う。ヌルハニムの作品は、一見するとグロテスクな変容を扱っているのだが、その真意はマレーシア文化の変容も照射することである。

『PASSING II』（遷境 II）
Au Sow Yee　アウ・サァウィー　2007/2008 年　6 分

『KAMI』
Nazim Esa　ナジム・エサ　2007 年　9 分

『puthiya vanam puthiya bumi』（プティヤ・バァーナム・プティヤ・プゥーミ）
Roopesh Sitharan　ルーペシ・シタラン　2005 年　5 分

『IN THE TANK』（水槽内）
Kok Siew-wai　コク・シュウワイ　2002年　3分

『THE BREATH OF TIME』（時の息吹）
Kok Siew-wai　コク・シュウワイ　2005年　10分

『Garlic Red Onion』（にんにく赤たまねぎ）
Masnoor Ramli Mahmud　マスヌール・ラムリー・マフムード　2006年　5分 30秒

『SAMSENG (GANGSTER) 』（悪漢）
Masnoor Ramli Mahmud　マスヌール・ラムリー・マフムード　2009年　1分

『CURIOUS』（興味津々）
Masnoor Ramli Mahmud　マスヌール・ラムリー・マフムード　2009年　1分

『HAPPY NEW YEAR MA…』（謹賀新年 マ…）
Masnoor Ramli Mahmud　マスヌール・ラムリー・マフムード　2009年　1分

『Making Night』（夜を作る）
Sharon Chin　シャロン・チン　2006年　10分

『seRANGga』（セランガ）
Nur Hanim Khairuddin　ヌル・ハニム・カイルディン　2005年　5分

『Soundscape Journal no 1』（音景日誌第１章）
Kamal Sabran　カマル・サブラン　2009年　10分

『proclaim』（宣言）
Hasnul J Saidon　ハスナール・J・サイドン　1995年　10分

10月8日（木）
15:00～

プログラム **A**
15:00 ～ 16:30

プログラム **B**
16:30 ～ 17:00
（短縮プログラム）

プログラム **L**
17:00 ～ 18:00

10月9日（金）
15:00～

プログラム **C**
15:00 ～ 16:30

プログラム **B**
16:30 ～ 18:00

プログラム **L**
18:00 ～ 19:00

10月10日（土）
15:00～

プログラム **H**
15:00 ～ 19:00

C 日本プログラム
～場所の記憶と映像の忘却～

ここにあるのはドキュメンタリーやフィクションといったジャンルの垣根ではない。作品が生成される場に立ち会った者とそれ以外との差があるのだ。作品を見る時、その差は俄に拡大し、またある時には驚くほど接近する。手法に傾倒するのはもう辞めよう。ここにある作品が映像の新しい力を示してくれる。

『それは表象の庭で失われた』
大江直哉　2007年　7分 40秒

『Shot』
西山修平　2007年　11分

『ここにいることの記憶』
川部良太　2007年　28分

『ふと木歩という名を思う』
杉田このみ　2008 年　20 分

『喪失の記憶』
奥野邦利　2008年　5分

『すみだ川のおもしろい～川の上でゴルフをする』
田中廣太郎　2009 年　11 分 45 秒

『福岡県在住作家プログラム』

L マレーシア作家による ティーチ・イン

マレーシアの作家は、それぞれの表現スタイルの延長に映像を位置づけている。音楽、パフォーマンス、インスタレーション、など隣接する現代美術をどのように捉えているのか？

10月8日（木）9日（金）の両日は、上映プログラム終了後に、来日したマレーシア作家の紹介とアーティストによる作品解説を行います。質疑応答も含めて、作品をよりよく理解するためのプログラムです。

Nur Hanim Khairuddin
ヌル・ハニム・カイルディン

Kamal Sabran
カマル・サブラン

Sharon Chin
シャロン・チン

Kok Siew-wai
コク・シュウワイ

順不同

H アジアの映像表現をめぐって
ウォン・ホイチョンと マレーシアのビデオアートを中心に

10 月 10 日（土）は「第 4 回福岡アジア美術トリエンナーレ 2009」の交流プログラム参加として滞在しているウォン・ホイチョン（Wong Hoy Cheong）の作品と動向を軸に、マレーシア、日本、福岡を結ぶプログラムを上映いたします。